



ぶつかりスリ

1月1日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

1月1日のおはなし「ぶつかりスリ」

え一年の初めからたくさんのお運びをいただきまして誠にありがたいのでございます。いつものことながらおかしな話をせっせとお話しさせていただくのでございます。

粗忽者 明けから暮れまで 初笑い

なんてことを申しまして、年の初めからずーっと途切れなく笑い通しなら、初笑いがそのまま年の暮れまで続くんじゃないか、初笑いの最長不倒記録でギネスを目指そうなんてバカバカしいことを申すのでございますが、まあそんな具合に一年笑って過ごせたらこれは間違いなくいい年なのでございまして。さしづめ恵比寿様なんてこれはもう昔っから初笑いの記録を更新し続けているんでしょな。そう考えますと、粗忽者になるのも、そうそう悪いことじゃない。

あれですな。みなさんの身の回りにもいますでしょう？ 粗忽者。いないはずがないんです。1人見かけたらまわりに20人はいると思え。なんていいますから、結構いるんです。人が、こう、何人が集まりますてえと、だいたいそん中に一人か二人そそっかしいのがいる。

「悪いね」
「おう、どうした」
「いや遅れちゃって」
「何に」
「何にっておめえあれだ、お通夜だよ」
「どうした、誰か死んだか？」
「死んだかって、やだよ、だからこうして集まってるんだろ？」
「ばかやろう、縁起でもない、うちはおめえ、これからめでてえ席を設けようってとこなのによ」
「めでてえって？」
「授賞式でい」
「あ、授賞式。葬式じゃなくて」

どうもそそっかしいのがあったもんで。おまけに正月から縁起でもない勘違いで人騒がせときているから始末におえません。こういうのを粗忽者といったんですが。

「で、授賞式ってのは何なの？」
「賞をあげるんだ」
「何の賞？」
「ばかだな」
「何が」
「だから集まってるンだろう」
「どうして」
「それをおめえ、いまから決めるんだ」
「どうやって」
「こうしてみんなして考えようってんじゃねえか」
「考えてどうする」
「決まったやつに賞をあげるんだ」

もう何が何だかわかりません。粗忽者のまわりにはどうも粗忽者が集まるようでして。こんなのがばかりが集まってる長屋を粗忽長屋なんぞと申します。

四谷の大木戸番の五兵衛って男が、勤め帰りにぶらぶらと弁天町あたりを歩っていると、すれ違い様どんっとぶつかったやつがいる。肩のところに勢いよく当たったもんだから五兵衛はくるくると回ってすてーん！と尻餅をついた。さあ、五兵衛が怒ったの怒んなかったの。

「馬鹿やろう！ どこ見て歩いてやんでい、こんちくしょう！ 人の肩に勢いよく当たりやがって！ こっちはくるくるっと回ってすて一ん！と尻餅ついちまった。なんだって肩んところに当たるんだ。真ん中に当たればそのまま尻餅だけつけたのに、くるくる回っちまったじゃねえか」

なんて何に怒っているのかよくわかりません。

「おいらあ、回るのは嫌えなんだ。やい！ どうして肩に当たった！ 犬畜生だっておめえ、ぶつかるときは肩になんかあたらねえぞ」

「何を妙なことを言ってるんだい」

「何だこの野郎！ お前か、おいらにぶつかったのは」

「違うよ、その人はもう、あっちに行ったよ。あんた逆に向かって吠えてんだよ」

「なんだと！ いつの間にあっちに行きやがった。ったく、すばしっこい奴め！」

「あんたがひっくり返って逆向いてるだけだよ」

なんて一事が万事そんな調子で、立ち上がってからすたすた歩き出したのはいいけれど、逆向きになってるもんですから、また四谷の大木戸に戻っちまったっていうからしょうがない。

「ああ痛え、痛えよう」

なんて五兵衛が肩を押さえながら大木戸に入ってくる。男とぶつかった肩の方の腕を何やらダラーンとたらしめて苦しそうだ。

「どうしたんだい。忘れ物でもしたか、五兵衛」

「お？ 何してるんだお前」

「木戸番だ」

「なんでお前がここにいる」

「そりゃあおめえ、おれの番だからよ。晩の番だからよ。晩のおれの番の番だからよ」

こっちもあんまりおつむはよろしくないようで。

「何だここは」

「何だって何だ」

「四谷の大木戸じゃねえか」

「そうだがどうした」

「なんでおいらがここにいる？」

んなこた、聞かれても困ります。

「忘れ物でもしたんじゃないのか」

「いや違う」

「じゃあどうした」

聞かれて五兵衛は弁天町あたりで、肩のところを勢いよくどーんとぶつけられて、くるくるっと回ってずっこけた話をした。

「そりゃあおめえ、スリだよスリ」

「何を！」

「そりゃあスリの手口だ。だいたい弁天町なんてところからして、弁天小僧みたいであやしいじゃねえか」

「スラれたのか、おいらは？」

「ああ、たいがいそういうことだろう」

「何をだ？」

「何をだって何だ？」

「何をすられた？」

「おめえが何をスラれたかなんて、おらあ知らねえよ」

男は片っ方の手をダラーんとさせたまま、もう一方の手で当たられた肩のあたりをこう探っております。

「ややっ」
「どうした」
「ない！ない！」
「ないか」
「ない」
「ないものがあつたか」
「あつたあつた」
「あつたのか」
「いや。ない」

付き合っているとこっちに頭がヘンになっちまう。

「何がない？」
「やられた！」
「やっぱりスラれたか」
「ああスラれた」
「何をスラれた」
「骨だ」
「骨？」
「ここんところにあつた骨がない」
「どこだ」
「ここだ」
「見せてみろ」
「いてててて」
「ばか！ これは盗まれたんじゃない。折れてんだ、この鎖骨ものめ！」
えー、おあとがよろしいようで。

(「鎖骨」 ordered by みやた-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

ぶつかりスリ

<http://p.booklog.jp/book/41549>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41549>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41549>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.